

(英語)

**話すことの言語活動を通して
自らコミュニケーションを図ろうとする子どもを育てる**

大阪 市 立 新 高 小 学 校 研 究 部

1. 研究主題設定の理由

本校では、昨年度より「英語」を研究教科とし、研究を進めてきた。理由としては、①英語の指導方法がよく分からないので学びたい ②今後児童が身につける力として英語が重要だと感じる ③英語に苦手意識をもっている児童が多い ④児童にもっと話す力を身につけさせたい などの意見があがったからである。

昨年度は、英語の授業の組み立て方や進め方などを共通理解しながら研究を進めることができた。また、委員会活動や掲示物などにも英語を取り入れ、英語に慣れ親しむ環境づくりを行ってきた。しかし、年度末の英語アンケートにおいて、「英語の学習が好き」「英語の学習は楽しい」と回答する児童は 87%、92%であるのに対して、「英語の授業の中で、先生や友だちと進んで英語で話していますか」という項目については、肯定的に回答する児童は 78%であり、自分の思いを英語で表現することが苦手な児童が多いとの課題があがった。

そこで、今年度も研究主題を「話すことの言語活動を通して、自らコミュニケーションを図ろうとする子どもを育てる」とし、引き続き、話すことの言語活動を通して、相手を認めながら、自分の考えや気持ちを伝え合える児童の姿を目指して研究を進めることとした。

2. 研究の趣旨

国境を越えて情報・知識が伝播し、多様な文化的背景を持った人々とのコミュニケーションが求められるグローバル社会において、子どもたちの可能性を広げる英語力を身につける教育の充実を図ることは、大阪市教育振興基本計画に示されている。しかし、他方で新しく始まった英語教育に対して、指導者が自信をもって授業を行えていない現状がある。そこで、児童に小学生のうちから英語の音に慣れ親しみ、聞くこと・話すこと等の言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を養うことをねらいとし、児童とともに指導者も「学び続ける」という視点で研究を進めてきた。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 主体的にコミュニケーションを図るための場や手立ての工夫
(目的・場面・状況の明確化)

- 英語の言語活動では、誰に・何を・どのような目的で伝え合うのかを明確にすることが大切。
- 言語活動の目的・場面・状況が明確に設定され、児童が興味・関心をもち、友だちと関わることができる題材であることが、児童が進んでコミュニケーションを図ることにつながる。

視点② 新高版イングリッシュリッチな授業の創造

- 指導者が全てを英語で行う All English ではなく、児童も含めて教室の中に英語をあふれさせる授業を目指す。
- コミュニケーションの4つのポイントを意識させるために、全学級に①Smile ②Eye contact

③Clear voice ④Response のポスターを掲示する。

視点③ 児童が自らの学習状況を振り返ることができる評価の工夫
(ふり返しシート・バックワードデザイン・新高版ループリック)

○ ふり返しシートの作成の仕方や、児童にわかりやすいループリックを研究する。

その他の取り組み

○ 委員会活動にも英語を活用したり、毎日の給食の時間にも、英語の曲を流したりする。

○ 校内の至る所に、児童や教職員が作成した英語の掲示物を貼ることで、児童が英語に慣れ親しむことができる環境づくりを行う。

○ 外部講師や C-NET、研究部による英語研修会を、年間5回実施。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

○ 絵カードやタブレット、イメージ図などを用いることで、英語の表現を視覚的に理解できるようになり、コミュニケーションを図る手立てとなった。また、ジェスチャーをつけて繰り返し英文や単語を言うことで、児童は理解を深めながら、楽しく英語に慣れ親しむことができた。

○ 児童も教職員も一丸となって英語の掲示物を作成したり、委員会活動の児童による英語での放送や英語の曲を流したりして、児童が英語に慣れ親しむことができる環境をつくることができた。また、給食や帰りの会、他教科等でも英語を取り入れ、普段から英語を豊かに使うことができた。

○ ふり返しシートを継続して2年生以上の学年で作成したことで、児童ができるようになったことや、次にはがんばりたいことを自らふり返し、主体的に学ぶ意欲につながった。

○ 本校の英語アンケートの「英語の授業の中で、先生や友だちと進んで英語で話していますか」の項目に対して肯定的に回答する児童の割合は、研究を始めた昨年度当初は、学校全体で75%であったが、今年度は82%に増加した。

(2) 今後の課題

○ 今後も言語活動の目的・場面・状況等を、より明確に設定した授業づくりを行い、児童にコミュニケーションの必然性をもたせ、主体的に活動できるよう意識して取り組んでいく。

○ 書くことについては、まだ4線に正しく書き写すことに慣れていないため、今後も引き続き指導が必要である。

○ 学校全体で、系統的なクラスルームイングリッシュを作成し、児童も指導者も、クラスルームイングリッシュに慣れる。

○ 高学年は、今年度タブレットを用いてふり返しを行ったことで、指導者がいつでも把握しやすいというメリットと、児童が取りかかるのに時間がかかり、3観点にそった評価がしづらいというデメリットがあった。ふり返しは紙で行い、パフォーマンステストなどは動画で撮影する方がスムーズに進むのではないかとの意見もあり、高学年の指導者の間でも、タブレットか紙かで意見が分かれた。

○ 中間指導では、コミュニケーションの4つのポイントを指導した結果、児童が意識するようになった。課題としては、中間指導のバリエーションを増やし、言語材料が正しく言えているか確認するなども指導できるようにしていく。